

家は、何にでもなれるのかということ、そんなことはまったくなく、もしかしたら彼女にしても、その実質的にはアンデス的なデザインを模倣し、生かすだけのテクニックはあったのかもしれませんが、彼女はそれをせずに、自分の文脈のなかで作品を制作した。それは、もしかしたらその作家としては誠実といえれば誠実な態度だったのかもしれないなあと思います。そうした意味では、そもそもの失敗は、彼女がこの仕事を引き受けた選択自体にあったのかもしれませんが、私自身も、地方のコミュニティに入って撮影することがときどきあるので、大変身につまされる話だと思いました。作家が、ある種のプロジェクトに関わる、ある地域に入っていったって何か作品を作ること自体が、ものすごくその地域の文脈と、あるいはその作家自身の抱えている、どうしても逃げられない文脈とのせめぎあいと直面してしまうのだなあということも、村上先生の話から感じました。

今回ベラルーシに来て、いくつか雑誌や新聞のインタビューを受けました。その一つは、ストレートに原発に関することでした。ベラルーシでは、ご存じの方も多いと思いますが、今、新しい原発が建築中です。しかしベラルーシは、ヨーロッパ最後の独裁国家といわれるぐらい、大統領が強い政治権力を握っている国で、原発増設についてもほとんど報道に上がらず、議論にもなりません。もちろん地元の方にも、福島のこともあり、建設に疑問を持っている人がいても、それを積極的に表明する人はあまりいないし、少なくともメディアの上では、まったくゼロだということです。それにまだ、街の真ん中に、KGB、秘密警察本部の立派な建物があって、結構びっくりさせられました。KGBも普通に活動しているので、うかつなことは、本当に危険で言うことができません。だからこそ、外国人である日本人の口を通して、原発反対の言葉を引き出そう、引き出してやるという、メディアの意地のようなものを、原発について私に尋ねてきた白髪の老いた女性記者からインタビューを受けながら感じました。いわゆる国際協力や、あるいは地域研究を専門にしている方とこうやってお話をしていると、外国人が別の土地、いわば自分の国以外の土地を研究する意味は何だろうと思うこともあります。それは、外国人だからこそ見えるもの、その国の人が当たり前すぎて見落としていることや、外国人だからこそ、空気を読まず吐ける「暴言」みたいなものもあるのかなあと思いました。皆さんが、別に各国で暴言を吐いているという意味ではないのですが。今回、

原発に関する取材などを受けるなかで、そう感じました。長くなりましたが、この辺でしめたいと思います。ありがとうございました。

■ 総合討論

柳澤雅之（地域研）：

発表後の質疑応答で、違う人が作ったら、違う地域区分図ができるのかという質問を頂きました。その時に、地域区分図は、人間が利用する生態環境のもっとも基盤となる図であり、基本的には誰が作成しても同じものができるはずだと答えました。しかし、少し説明不足だったと思います。そのことが当てはまるのは、東南アジアだからです。ほかの方からも質問がありましたが、生態基盤そのものが社会や文化に影響する程度は地域によって違います。発表で紹介した高谷先生が『世界単位論』の中で、世界が単位に分かれていると書かれ、その基盤に、あたかも生態環境があるかのような印象を多くの方が持っているかもしれませんが、世界が単位に分かれる根拠は、全然生態に関係ない要因がたくさん出てきます。たとえば中国では、思想が中華を一つの単位としてまとめていると書かれています。このことが示しているのは、高谷先生が中国を見たときには、中国を生態では全然説明できなかったということです。中国が歴史的に形成されるプロセスが、生態環境とは全然生態とは違う原因によって引き起こされており、その要因を、思想だということにして、ずいぶん批判を受けることになりました。これは一つの例ですが、生態基盤というのは、人の歴史という短い時間と比べると、非常に変化が大きく、基盤にはなっているが、それが人の社会や、歴史という短い時間に起きていることをどの程度反映するかということに関しては、全然地域によって違います。ですからやはり、地域を限定して答える必要があったと思います。

谷川竜一（地域研）：

コメンテーターの三方からいただいたコメントはとてつながつて聞こえ、非常に共感することが多くありました。特に、石川さんがおっしゃった、エスキスということに関してのとらえ方は、私もそのようにとらえてくださって大変ありがたかったです。頂いたコメントの中で、私自身学ばせてもらったと思うことを先に述べておきたいのですが、エスキスという作業に関するとらえかたです。自分が案を出した後、誰かに意見をもらってそれ

を受けて、じゃあ、こうしようか、あるいは、それいいから変えていこうか、というような行為をエスキスと私もとらえています。それを他人の目で作品を読み直す作業だと、石川さんはおっしゃった。他人の目になってみるという点で、チャンネルを切り替えてみる—それは単純に視点という意味もあると思いますが、それ以外にもスケールを切り替えて見たりするような意味も入っていると思います—、そういったドラステックなエスキスのとらえ方は、非常に面白いな、さすがに作っていらっしゃる方は適切な言葉をもってらっしゃるなととても響いてきました。そしてカタチが出来上がった後で、そのカタチそのものが、作り手側の意図しない次なるカタチを呼び込んでしまうということの面白さは、私自身強調したかったことなので、それが具体例を通して伝えることができたとすれば、大変うれしく思います。逆に私としましては、作り手の方は—例えば石川さんは、そうした自らの意図を超えてご自身が設計されたもののカタチが変容していく様を、作り手としてどのような気持ちでご覧になっているのか、という点に興味があります。

建築家を含めて、作家が何かを作ったにもかかわらず、それが別のものに読み替えられてしまうことに対して、建築家自身も気づいていないということが、私自身は大変面白いと思って研究しております。ナショナリズム批判や植民地主義批判といったものは、ある種の予定調和的な議論のように少し前から感じているのですが、こうしたカタチの変容、それを時にすると違う方向に変えてしまうヒントや可能性があるように思っています。

山本博之（地域研）：

まず石川さんのコメントで、地域のこれまでの由来だけではなく、これからを考えることで、動的に地域をとらえることができるという点がありました。それに対応してみると、今回のワークショップで私たちがいただいた課題は二つあるように思います。自分の研究対象を分野や関心が違う人にその面白さを説明しなさいというのが一つ。そのプロセスをモノやカタチという目に見えるものを通して、自分自身が地域をどう理解し、その先をどう見据えているのかというプロセスと展望を提示しなさいということが二つ目です。

自分が関心を持つものを、分野や関心が違う人にわかるように示すというのは、言葉ではなくてカタチで分かりやすく示すことが有効です。先の

二つの課題は、別の言い方をすれば、自分の研究について魅力的な謎と答えを視覚的に示してみろということと、自分の研究の魅力を固有名詞抜きで語ってみろというお題だったと思います。この二つはぜひ、会場にいる皆さんもそれぞれご自分の研究に即して考えてみていただければいいかなと思いました。

また、川喜田さんと深田さんのコメントには共通している部分があると思いました。川喜田さんは、研究あるいは研究者が語る力に自覚的になりなさいという戒めだと思いましたが、深田監督は、映画が伝える力に自覚的になりなさいということかと思いました。お二人のご意見はもっともだと思いますし、私の意見も結論としては一緒になるかもしれませんが、せっかくの議論の機会なのであえて違う方向から反論するとすれば、研究者の力というのはそんなに強いのだろうか、そうではないのではないかというのが私の一つ目の感想です。もしかしたら、日本の名の通った大学の看板を背負って、たぶんこの研究者と仲良くしておく研究プロジェクトに加えてもらえてたくさんお金が付いてくるだろうとか日本に呼んでももらえるかもしれないとかいうことをにおわせるような付き合い方をしていると、自分が知らず知らずのうちに研究者が現地で力を持ってしまふことがあるかもしれません。だからそれを戒めなさいということは、考え方としては納得できます。とはいえ、町のコーヒーショップや村の市場でものを売っている人たちと話したりしていると、そういうことはありません。大学から来たから何だ、と、お前はここで何をしてくれるんだっていう話になりますから。だから、私は研究者が言ったことがそのまま現地社会で力を持ってしまふから気を付けるべきだと思ったことはありません。一面的な見方でもいいから、どんどん発言していけばよくて、どうせ研究者の言葉はそんなものとして消費されていくのだから、もっと声を大にして語ってしまえばいいと思います。研究者が思うことを語って、現地の人からそんなことはないと言われながらも、いや、それでも自分はこう思うんだと話をしていけばよいのだらうと思います。研究者が語ると力を持ちすぎるとというのは、研究成果を社会に発表しない口実に使われることのほうが多いと思うので、あまり研究者の語りの力の心配をしすぎないほうがよいというのが私の考えです。

それから、深田さんがおっしゃった、外国人だからこそその語りに関して、深田さんは外国人だから暴言を吐いてみるということをおっしゃって

ましたが、この考え方は私も同感です。暴言を吐くという言い方をしましたが、これは別の言い方をすれば、多様な声を提供している、あるいは多様な見方を提供しているということだと思います。だから、外国人だからこそ、よそ者だからこそ語る意義があると思います。暴言ついでというわけではありませんが、自分が研究対象としている地域の教育水準が上がって現地の研究者が育ってきたら私たち地域研究者がやるのがなくなってしまいうんて言っている研究者は、現地の研究者が育ったらとか言っていないで今すぐにでも地域研究者を辞めればいいのにと思ったりします。それぞれ違う背景を持った人が現地社会に暮らす人とは異なる見方を提供することに意義があるのだから、現地の研究者ですぐれた人がどんなにたくさん出てこようが、外の世界から見ることの意義は決してなくならないと思います。それは暴言を吐いているだけでなく、多様な声を提供しているのだからというのが私の感想です。

福田宏（地域研）：

私は外国の歴史を対象としていますので、異なる地域の異なる時代という、いわば二重の意味で私たちの社会から離れた地域を見ることとなります。そのため、川喜田先生がおっしゃったように、研究対象を理解し、それを伝えることの難しさは、私自身も痛感しています。今はパワーポイントなどもあり、画像や映像も簡単に紹介することができるので、「わかりやすく」伝えることは容易です。しかし、例えば授業でナチスの党大会の映像を見せて、学生さんから「分かりやすかった」「興味深かった」というコメントを頂くことは多いのですが、「ナチスってすごいんですね」という感想も出てきたりします。つまり、非文字資料は一見分かりやすいのですが、伝える側が意図していなかった解釈も簡単に出てきてしまいます。非文字資料を扱うことは、今とても重要だと思いますが、分かりやすさが故に、解釈も開かれています。それを地域研究者がどう解釈していかに伝えるかということ、そしてその伝え方がこれからどのようになっていくかということ、これまで以上に考えなければいけないと考えています。

村上勇介（地域研）：

深田さんからの、作家についての理解をもう少ししてはどうかというコメントにお答えしたいと思います。私自身は作家個人も尊重したいと思いますし、設計の経緯としては個人的なつながりで

頼まれたという部分があります。そのなかで、その作家ご自身の成り立ちといったなかから表現がでてきているということも十分理解できることです。それによる、プラスの面とマイナスの面といえますか、白人、特に白人系といったら言い過ぎかもしれませんが、一部の人々には非常に受けがいいわけです。しかし一般に広まるというレベルにはなかなかいっていない。そうしたなかで、少しずつでも広まっていくという部分はあるでしょう。しかも、作家が意図しなかった部分としてのプラスの側面—もちろんマイナスの部分もありますが—もあります。時間がなかったのでご紹介できませんでしたが、例えば、具象的な表象に付け加えるかたちで、地域によってはこの『涙する目』に似せたモニュメントを作る動きも出てきています。それは、乱反射しながら展開してゆくのだと思います。先ほど山本さんもおっしゃいましたが、私がこう解釈したといったものは、現地の人から見ても違うというか、現地のものとは言えないとか、あるいは現地の人と言えなかった、ストレートに表現しなかった、できなかったことも、外国人ならできるということもあるでしょう。あるいは、将来というお話もしましたが、結構、現実や現在のなかに閉じ込められている部分もあると思います。そういったものを踏み越えて、こういう可能性もあるということを示唆することも非常に重要ではないかと、コメントをお伺いしながら思った次第です。

もう一つは、先ほどの将来に向けてという話のなかで、現実には流動的かつ複雑な動きをしますので、われわれが研究者として言ったようなことも、そのなかに放り込まれていくこともあります。それが乱反射もしつつ、どれだけ後々影響力を持つのかわかりませんが、一つの動的に動く材料になれば、それはそれで一定の役割を果たせたということになるのではないかと、思います。



会場内の様子

川喜田敦子：

今、皆さまのご意見をうかがって考えていたのは、研究者の語る姿勢についてです。意図とは違う形で解釈されてしまうことへの恐れや、自分の語ることの影響に対してどこまで神経質にならなくてはならないのかという話は、その研究者自身の発信の姿勢と大きく関係していると思います。

たとえば山本先生のお話から感じたのは、現地社会に対して地域研究者は何ができるかという問いとそれへの答えが、私が普段考えているものとは大きく異なるということです。私自身は、ドイツの戦後処理や過去の記憶の問題を研究しています。その場合、私は日本人としてドイツの問題を扱いつつ、どういう形で日本社会に対して発言していくかということに比重を置いているような気がいたします。場合によっては政治的な問題に発展していく可能性があるテーマでもありますので、意図と違う形で読まれることを私は大変恐れます。同時に、現地に対してどう発信するか、自分の社会に対してどう発信するかというバランスの問題についても常に考え続けています。自分の所属している社会に対して発信したいメッセージがあるときに、ドイツという地域を表面的に分析すれば、自分の発信したい、都合のよいイメージが描けるかもしれません。しかし現実のドイツの文脈を細かく見ていくと、その地域独特の、日本とはまったく比較のできないような論理、もしくはダイナミクスが働いている部分がやはりあります。その地域のことがかげればわかるほど、日本では発信できなくなっていく、というようなことも場合によっては起こってくるわけです。そういった様々な意味での発信の姿勢やバランスの問題は、おそらく個人の好みであると同時に、どのような地域を対象に、何を研究しているのかという条件とも大きく関連しているのだと思いました。

石川初：

谷川先生にいただいた質問へのお答えに絞ってお答えします。自分が何かを建設するという事業に設計として関わっているなかで、作ってしまったものが誤読されたり、あるいは思わぬ使い方されたりして、間違われていくことに対してどう折り合いを付けているかという質問だったかと思います。それにはいくつかのスケールがあって、たとえば、局所的には、そういうことは非常にしばしば起きていることです。座ってもらおうと思って作った40センチの段差を、子どもたちが飛び降りまくってけがをして問題になり、手すりを増設

するというような、まさに実物でエスキスが行われたりします。地域的なスケールでは、私の専門だと樹木を使ったりしますが、すでにどこかで20年かけて大きくしてきた木をそこに植えるのは、言ってみれば歴史をねつ造しているのです。20年たった大きな木をそこに植えることによって、そこは向こう100年ぐらいいい環境だと保証しているようなところがあります。そういう意味では、造園係は、空間を動的にしていく役目なので、今回うかがったような問題意識は、非常にぴんとくるところがありました。

長期的には、非常におこがましい言い方であることを承知で言わせていただくと、特に外部空間は、ある対象地で完結するものではなく、その対象地の環境を成立させているより広域の文脈をよく調べないと成立しないものですから、一生懸命調べます。そしてそこから引き出した何かを、そこを使っている人に対して、バトンを渡すような、そういう気持ちで示していこうことを常に心がけています。ですから、ある土地に行ったときに、その土地の潜在的な、誰も気が付いてないいいものを見つけ出して、それを形にする努力をすることによって、次の世代の人たちがデザインする際の与条件として参照されるような物事を作ることができるといいなと思っています。そこでいつも問題というか、自分自身が恐ろしく、問いかげずにはおれないのは、そこをどれくらい正しく読み取ったか、誰も教えてくれないことです。本当に自分がその土地をわかったかどうかは、ついにわかりません。先ほど、ペルーに招聘されたオランダのアーティストの話に通じることがあります。結局、自分がわかった、そして伝えられると思った、その土地のキャラないし良さが、果たして正当だったのか、あるいはそれがどのくらい射程距離で有効であったのかは、永遠にわからないことであり、いつも一番悩むところですよ。悩むところであり、そこがわからないからこそ、様々な手立てをつくしていくと、思わぬ姿が浮かび上がってくるようにして、地域の見知らぬ横顔が浮かび上がることがあります。それが面白いところでもあると思います。

渡邊英徳（首都大学東京、地域研客員准教授、情報学・芸術工学・デザイン）

首都大学東京の渡邊です。今日は本当に楽しく聞かせていただきました。今、僕は、ツイッターで皆さんのお話を実況していて、それを読んでいる人からの提案がありました。この会の趣旨は、

与条件の変化や現実に対応しながら絶えず計画を練り直していく建築のエスキスと呼ばれるものを引用していますが、今、ちょうど東京でニコニコ学会が開催されています。お聞きになったことがない方に説明すると、発表をストリーミングでネットに流して、見ている無名の人たちがリアルタイムにコメントを付けていけます。もし今度、同様のテーマでこのワークショップのような内容を実施することがあったら、そのプラットフォームでやってみると興味深いことが起きるのではないかと思います。研究者の方一人一人がいろんな事象について解釈を施していますが、それについて無名の人たちが賛同するか反対するか、あるいは俺はこう解釈するというのがリアルタイムに付いていくのが発表者にも見えます。そのため、その後のプレゼンテーション内容に影響が出てくるかもしれないし、ああ、このコメントいいねということで、さっきの僕の意見は取り下げてこちらを採用しますという形が出てくるかもしれません。先ほど、研究者としての立場の議論にもなりましたが、一度そういう形式で、無名の多数の人たちに開いた形でプレゼンテーションをする場を設けていただくと、また新たな発展があるのかなという提案です。しかも僕の提案ではなくて、僕のツイートを見た誰かからの提案です。谷川先生と柳澤先生に答えていただきたいなと思いました。

谷川竜一：

とてもいいアイデアですが、私がとても戸惑って、慣れるまでに時間かかりそうだなあと感じます。やはり目の前にいる人や会場を見ながらプレゼンテーションを組み立てるくせがあります。それをうまく軌道修正したり、化学反応させたりしていけるならいいですが、難しそうですね。

柳澤雅之：

今回の全体の構成や意図からして、地域研究者のみを対象にした発信ではないということは初めから意識していました。コメンテーターの方々も全然違う分野であるし、映画監督からのコメントもありました。ですので、このことを延長し、ご提案されたような形で開催することに対して私自身は全く違和感はありません。

ただ、今の話を聞いてもう一つ思ったことは、関連する狭いコミュニティで話をする場合よりも、より開かれた場で話をするほうが、より率直で忌憚のない意見を出し合うことが可能かといえば、必ずしもそうではないと思っています。私が前に

いた研究所は、割とはっきりと意見を言い合う、ざっくばらんなところでした。研究会では、君は間違っている、おかしい、といったところを非常に率直に言うようなところでした。別にツイッターやそのストリーミングによる展開を待たずとも、そうした場づくりは可能だと思います。だから、そう言える場をどんどん作っていくことが基本的には大切で、そのことが研究を発展させることにつながるのだらうなと思いました。

山本博之：

一つ伺いたいのですが、ストリーミング中にたくさん出てきた質問には全部答えなければならないのですか？それとも放置してもいいものがあるのですか？

渡邊英徳：

ピックアップするかしないかは、こちらの自由です。ただそのコメントは、来場者みんなが見ていますから、その取捨選択まで含めて、実は評価されてしまうということです。ネガティブなら全部目でスルーして、賛同だけピックアップするスタイルを取ると、そういう研究発表だという印象が形成されるということです。

山本博之：

渡邊さんのご提案が、今ここで行われているようなこれまでの形の研究会とどこが違うかなと考えていたんですが、今行われているような研究会では、野次はあるかもしれませんが、基本的に一度に一人が発言して、それに対して質問を投げかけられたらその人が答えないとイケないという仕組みですよね。それに対して、同時多発的にたくさん意見が出てきても、それに全部は答えなくてもいいというのであれば、それは最近の流行の言葉でいうとビッグデータ式の意見に対してどう対応するかということに通じるころがあって、研究会の性格がちょっと変わるかもしれないけど、そのあたりには興味があります。誰から、どういう形で発言されたものがその場で意味を持つのか、つまり取り上げられて回答される対象になるのかという選択の基準が変わってくるかもしれないけど、それはおもしろそうだなと思いました。

石川初：

場を共有している人の特権というか、来た人だけが聞くことができるここだけの話のような空気が失われるのは、なんだか少し残念ですね。たと

えば、みんながUstreamで見えてしまうとネタが尽きるというか、同じ話をできなくなるような、そういうプラティカルな理由もありますが、それ以上に、そこで議論をして共有した人だけが味わえる特権みたいな空気があり、その辺は、分けたほうがいいですね。

渡邊英徳：

会場にいる人とネットで見ている人ということで、違いはあります。今日、僕はこのワークショップは居心地がいいなと思っています。たぶん、しつらえや人選や時間配分といった、言葉にならない部分のデザインが、誰かもしくは誰かたちによってなされているからうまくいっているような気がします。それは、そのストリームなどでは流れないだろうなと思いつつ、今の石川さんのお話を聞いていました。

参加者 A：

今日のお話、研究者はさまざまなカタチ、自然と人間環境系の地域区分や、あるいは建築、映画、身体、モニュメント、こういったさまざまなカタチに内在する意味や歴史を読み取って、そこから地域を描いていくというお話だったと思います。そのカタチに第一義的に関わっている地域の人々、地域住民、これはもしかすると一番いい批評家ではないかもしれませんが、それでもそういう人たちに対して、研究者が読み取ったあるいは導き出した解釈というものを投げ返していくわけですよね。そしてそこから応答を得て、そこでまたカタチを持つものになったり、そのイメージなりを膨らませていったりするという作業も、エスキスという方法論のなかに含まれるのかどうかを知りたい。

山本博之：

映画のことでいえば、監督たち製作者と一般社会の人たちは少しずつ別の考えを持っていたりします。監督たちについては、私はマレーシアの監督たちに比較的会いやすいので、機会があれば、自分はあなたの作品をこういうふう読んで愉しんだ、おもしろかったといった話をすることはあります。そうすると、監督からは、そんなことは意図しなかったけど、言われてみればそうかもしれないといったやり取りに発展することはあります。

一般社会の人たちについては、『タレントタイム』の例で言うと、マレーシアの人たちはヤスミン監

督を評価するようになってきていますが、過去の作品が全国規模で上映されるようなお国柄ではないので、作品について一般の人たちと何らかのかたちで意見のやり取りをする具体的な機会があるわけではありません。年に一、二回程度、マレーシアでDVDの上映会などをしてマレーシア人と一緒に映画を見る機会を作って、自分たちはこの映画をこう見て愉しんでいると言って、感想を伝えたりしている程度です。ヤスミン監督の作品をマレーシアの人たちにもっと見てもらえればいいなと思ってやっていることですが、その場でマレーシアの人たちからどのような意見が出てくるかを聞いて、自分たちの考えを見直すきっかけにすることもあります。

参加者 A：

たとえば、地域区分に関しては、地域住民の環境認識というのも当然ありますよね。住民との応答という点から見直すとどのようなお話になりますか。

柳澤雅之：

今日の私の話の地域区分ですと非常に大きなくくりですが、住人の環境認識は基本的には全部その区分のなかに入っています。住人の環境認識はもっと細かいレベルで起きていて、大きな地域区分図を作成するときには、直接、影響されることはありません。ですが、現地に入って、過去50年とか100年ぐらいの村の変化や農業の変化を聞いて回ります。私自身は農学出身ですから、農村開発や農業の専門家ということで村に入ります。そうすると、村人からは、どうやったら発展するのか、どうやったら儲かるのかとよく聞かれます。それに対して、一度きりしか訪れる機会のない村では、その場で考えられる限りのアイデアを披露します。しかし、ずっと長期で関わっている村では、もっといろいろな関わり方の形があります。たとえば日本大使館に話をつけて学校の建物をきれいにしてお金を取ってくるか、あるいは財団のプロジェクトを別途取ってきて、村人のキャパシティ・ビルディングのようなプロジェクトと一緒にするとか、いろいろな方法があります。こうした関わりは、もうやらざるを得ないという感じですが、最初は嫌々やっていましたが、やってみて面白いなあと思ったのは、たとえばベトナムの村に私のような日本人の農学出身の研究者がいると、村の人は私を利用するようになります。私が、ベトナムの農学研究機関の人、海外援助機関の人と繋がっているこ

とを知っているからです。村人は私に、どここの研究機関の人に話をつけろとかいいはじめる。そういった形で自分自身が地域に関わることによって、村の人もまた新たなネットワークができ、お互いに使い合うようなことが起きます。これが大変面白いと思います。こうなってくると、どっちが使って使われているかわからないようになります。まだ論文にしていますが、そうした関わりそのものが、たとえば農業分野とか技術援助の分野はどんどん増えていると思います。おそらく人類学もそういうことに巻き込まれるケースがたくさんあると思います。これは新しい、多様な人が地域に関わるようになった時代の一つの研究のやり方ではないかと私自身は思っています。だから、積極的に関わったほうが面白いと思います。

参加者B:

柳澤さんのおっしゃったことに関連しながら、今日のシンポジウムの感想にもなるお話を少しさせてください。私自身は、介入という点に非常に興味があります。柳澤さんのさきほどの話でいうと、そういう研究をやっていくなかで、現地社会と別の関わり方ができてくることの面白さの話をされていましたが、私も記録の話で、展示やビデオなどを作る活動もしています。研究とそういった表現活動は、ある種の乗り入れです。山本さんの今回の地域研究でいうと混成アジア映画というお話でしたが、その研究と地域社会が混成していくことが面白い。今日のお話でも研究者と、石川さんや深田さんの表現される方の組み合わせ、研究と社会との乗り入れのようなことの面白さが、もしかしたらあるのかと思いました。私自身がそういうところに関心がありますが、もしほかにも、研究でなくてプロジェクト型でやられていることから得られる示唆といいますか、その面白さがあればお話したいです。また今回のこの人選がそうした味が効いていて大変良かったと思うのですが、もしかしたら地域研究自体がそういう方向に向かうということを思って、シンポジウムの企画者の方は企画なさったのかなという気もしましたので、質問させていただきたいと思います。

西芳実:

全体に関わってくるご質問だと思いますので、今のご質問をうけて全体のまとめに入らせていただこうと思います。今日のお話は、エスキスが大事だ、そしてエスキスしていくためにはある種の「隙」が必要であり、常に解釈の場が開かれている

ようにしなければいけない、しかもその解釈は動的に変わっていくものだ、というところに重点があったように思います。「主観のパッチワーク」というお話もありました。では、ここでみなさんに質問です。隙をつくって多様な解釈の場を開いておくことは、チャンスをつくるという側面もありますが、別の言い方をすれば、どんな解釈をしてもよい、「何でもあり」ということにもなるかと思えます。おそらく、「何でもあり」にしない、何らかのルールを皆さん自分に課していることと思えます。そのあたり、いったい皆さんはどこを大事にして、どんなルールを自分に課しているのかというのかということについて一言ずつお願いします。

柳澤雅之:

さっき山本さんが、好きなことを言ったらいいとおっしゃっていて、私も基本的にはそう思っています。最近新聞などの論説で、大学の先生ともあろう者がいいかげんなことを言うな、といった論調がありますが、私はまったく逆で、大学の先生だからこそ、いいかげんなことを言ってもいい、より正確に言うと、試論やアイデアをどんどんだせばよいのだと基本的には認識しています。ですが、さっき私が出した村の例にもありますように、そう言っていられない場面が出てきています。それは研究者に大きな期待がかけられているからだと思います。特にいわゆる途上国の村に先進国から農業研究者が行けば、そういうことは非常にビビットに感じます。そんなときに、これもあります、あれもあります、といった試論ばかりを言っているわけにはいきませんので、そこは、より具体的な案を一生懸命考えます。適当なことを言っていると、二度と話もしてくれませんか、二度と村にも入れてくれない。ですから、そこは、全身全霊をかけて、言葉を選んでちゃんとしたことを言おうとはしています。もちろん間違えることはありますけどね。少なくとも、そうした心づもりで自分ではやっています。

谷川竜一:

地域の人に何をどう返すかという質問が先ほどありましたよね。私個人の問題だと思いますが、「地域の人」というくくりや輪郭がすぐには思い浮かばず、やっていることも建築の空間分析や歴史研究が中心ですし、誰に何を返せばいいのかというのは、いつも悩みます。学術論文を書く以外に果たしてどのようなことをすればいいのか、ぼんやり思って聞いていました。社会と関わりをもって

研究をしなさいと、大学院生時代からずっと教えられてきたわけですが、研究者になった今、社会や地域の人という言葉では、しっくりこない自分がいます。たとえばインドネシアのジャカルタで、屋台の調査をしたことを思い出します。ジャカルタの屋台は店主たちが作った手作りの屋台なので、これは店主たちのアートだと読み替えて、現地で屋台の展覧会をしました。これは山本さんのお話にあった、外部からの暴言の最たるものかもしれません。屋台の家主たちはいつも都市の厄介者扱いされているので、そうではなく彼らも主体的な都市の一構成員であり、都市のデザイナーなのだ、という意味も込めて研究にもとづいて屋台の展覧会をしたわけです。少なくとも私にはそのように読み解けたわけです。そんなことを通して地域の人に成果を返そうとしましたが、結局、私のなかで手ごたえはあんまりありませんでした。ただ、手ごたえがあったのは、私の身の回りの友達とか、一緒に展覧会を開いた仲間だけでした。その程度でしか私は地域に返すパイプを持っていないし、そうした固有名詞でしか満足できない部分がある、というのが今のところ、確かな出発点です。受け止めて返すという、エスキスの工程の中で、そうした相手は必要不可欠であり、そこを曖昧な言葉で見失わないようにしていきたいと思っています。

山本博之：

今日の議論で一つ印象に残ったところは、福田さんがおっしゃっていましたが、カタチの解釈は開かれているということです。とはいえ、文字や文献だったら、解釈は閉ざされていて一通りに定まるのかということ、きっとそんなことはなくて、文字でも文献でも解釈の幅は開かれているのではないのかと思います。だからこそ文献研究の意義があるのではないのかということもあわせて議論できるのではないかと思いました。それから、西さんから出されたお題で解釈の幅を無制限に広げてしまわないために大事にしているところについては、一言で答えるならば「愛」だろうと思います。ただしこれだけだと意味はよくわからないでしょうから、それをなるべく言葉で説明してみたらどうなるかを少し考えてみて、今のところ次のような説明はどうかと思っています。大学院生になって東南アジアに関する学会に入ったばかりの頃、学会の第一線で活躍していた先生たちが、東南アジアの人たちはこう考えるのだというような議論をしていました。私はそれを聞きながら、議論の内容自体と、そのような議論をする背景にある先

生たちの思いを自分なりに理解しようとしてきたということがあるので、自分の考えは当時の先生たちの議論に込められていた思いに照らして堂々と言えるだろうかと考えるところがあります。その一方で、現地社会については、今となってはいろいろな付き合いができてきましたから、現地のいろいろな人の顔が思い浮かんで、これを言ったらどういう反応をするだろうかと考えることはあります。現地の人といってもいろいろな人がいて、すべての人に納得してもらえることを言うの不可能で、実際にはその場その場で自分の中で折り合いをつけていると思いますが、改めて突き詰めて考えてみると、研究というのは卒論に始まり卒論に終わるのだという言葉聞いたことがありますが、自分の場合は、卒論で取り上げた人物がもし生きていて私の話を聞いたらどう考えるかを想像してそれに照らして妥当性を考えているところがあるかもしれないと思いました。

福田宏：

今日ご紹介した体操の映像は非常にインパクトの強いものですが、注意しなければならないことは、それに参加しなかった人もいたという点です。体操なんて私には関係ないという人がいたはずですし、たとえ一緒に体操していても、お付き合いで参加しているだけで実際には白けていたかもしれません。そういった、いわば歴史学の世界で「無関心」をどう捉えるかという点が、一つの課題としてあると思います。記録に残らなかったマイナーな出来事、あるいは大きなイベントであっても参加しなかった人、といった史料だけでは見えないものをどのように捉えるかという点は、これから考えなければいけないと思います。

村上勇介：

私の関心は政治にあり、地方の村落政治を含めて観察しています。私が気を付けなければいけないと思っているのは、権力性といった政治性です。先ほどの話もありましたが、思わぬ反響を呼ぶということも含めて、どういう帰結をもたらすか、考えるだけ考えていますが、それでも思い及ばないことも多いと思います。村落、共同体の話、先住民の人たちのアンデスの山のなかのこまごまとしたお話というのは、固有名詞がたくさん出てくるお話ですので、その現場にいる人たちというのは、それを全部理解しています。けれどもそれはそれとして、前向き思考といえますか、未来志向でいこうという方向で何とか考えようとしてい

る部分がありますので、そういった時代性も配慮しながら、発言を考えることにもなります。その辺りの考えを進めることが、自分に課していくという部分だと思います。

川喜田敦子：

今日のここまでの議論は、地域研究という共通項の下に分野がばらばらの人たちが集まって行なわれてきています。だからこそ、普段、自分の狭い専門領域のなかで話しているときよりもはるかに、どう伝えるかということに比重を置いた話になっています。伝える、もしくは提示するという行為に対して、これほど意識的になることは普段はないでしょう。そして、伝える、提示することが話題になっているので、何を言おうかと考えるときに、聴衆の存在というものが非常に大きくクローズアップされることになっているのだと思います。先ほどご提案がありましたように、聴衆の参加を限りなく開いていこうという話になるのも、ここが、聴衆を非常に意識した場としてあるからこそ結果なのかなと思います。

そういう場で、自分自身が何をどのように言うか、それがどのように解釈されるかということと同じくらい大事なものは、開くとか開かないといった話をする場合には、ある一体感が前提になるのではないかなということだと思います。私は、日本の大学教育で足りないのは、ゼミ的なもの、つまり議論するということだと考えています。同じく、こういう場であっても、——フロアを含めた——すべての参加者が同じ立ち位置に立って議論していくということが非常に大事であると思います。そのように議論するということに私が重視するのは、意見をやり取りした結果、個々人がより良い意見、より納得できる意見を見つけつつ、全体としてだんだん良いほう、すなわち、より面白く建設的な議論になっていくように、参加する人間が一緒に作り上げていこうとする意識が共有されているということです。その気持ちが共有できることを前提として、いろいろな人に開いていこうということであるのなら、意味があるのかなと考えました。

石川初：

カタチの解釈は何でもありなのかなというご質問に関しては、私自身は、カタチの解釈は実はわりと限定的で、みんないろいろ自由に解釈しても、しよせん何かある幅のレンジに収まるのではないかなという気持ちがしています。それに関してはわ

りと楽観的というか、カタチさえしっかり見えていれば、みんなあまりブレないのではないかなという気がしています。自分自身のラインというか、一線を少し考えてみましたが、たとえばプレゼンで成功する、といったところがあります。ウケたらオッケーというところはあって、それは笑いを取れば勝ち、といったところに近い。非常に相対的な保証のされ方ですが、そういったものを積み重ねるしかない、自分では思っているように思いました。ですから自分の解釈は、日付を打って、今のところ最新というようにして、記録に残していくようにしていくしかないかなと感じました。

今日のすごく素朴な感想ですが、さきほど監督が、われわれの代わりに世界のいろいろなところに行って情報を集めてきてくださる、といったことをおっしゃっていましたが、まったくそう感じました。こんなに世界中からものすごい情報を集めている研究者集団があるということは、発見でした。とても頼もしいというか、わくわくしましたし、諸先生方にGPSでも持ってもらって、どこへ行ったかマッピングしたいです。そして何年かしてからそれをグーグルアースの上にもプロットして、地域研が主に行っているところを地図にしてみたいという、そういう欲望に今駆られています。

原正一郎（地域研）：

皆様のご協力をいただき、本日の参加者は100名を越えました。これまでの地域研の4月のワークショップでは最高記録かもしれません。繰り返しになりますが、今回のワークショップには幾つの特徴がありました。一つ目は、とてもアトラクティブなテーマを設定したことです。二つ目は、発表の方々には大変だったと思いますが、テーマに合わせて各自の発表内容を工夫してもらったことです。三つ目は、コメンテーターの方々も含めて、オーディエンスに向けてわかりやすく話していただいたということです。実は、今回のワークショップに向けて、予行演習を初めて行いました。半日かけて、ああでもない、こうしたほうが分かりやすくなるのではないかなといった試行錯誤を繰り返した結果、とても分かりやすいプレゼンテーションに仕上がったと思います。

私は情報が専門で、地域研究者の発表している内容や行っていることがらをなかなか理解できなかったという経験が多々あったのですが、今回はいろいろと話し合う機会に恵まれて、その意味では、このワークショップの成果を一番喜んでいる

一人かもしれません。たとえば柳澤さんの話です。彼と一緒に海外に出かけたときのことなのですが、飛行機から田んぼを見てバシャバシャ写真を撮っていました。その時は何をしているのかなあと不思議に思っただけでしたが、ああこんなふうに写真を読んでいたのかと、今回の話を聞いて初めてわかった気がしました。また、村上さんの話は、実はこれまで何回聞いてもよくわからなかったのですが、今回は、そうか、こういうことだったのかと何となく合点が行きました、この調子で地域研の中で議論を続けたら、もっと地域研究が分かるようになるのかなと、実はわくわくしていた次第です。

さて、地域研では、いろいろなデータベースを構築し公開しています。これまではデータベースを使った研究をして欲しいと、情報の側からお願いしていました。今日は、そのデータベースからどのように地域を読んでいるのか、あるいは読めるのかという地域研究の側からのお話でした。今日の成果をどうやって情報システムに反映したらいいのか、非常に難しい宿題を突きつけられてしまったなと考えています。何年かしてその答えが出れば良いなと思っております。本日は本当にありがとうございました。